

失業者が増えると社会が不安定になる

何十年も前に誰かの講演で聞いた言葉であるが、印象に残って、妙に忘れられない。今、まさにそれが現実に起こりつつあるので、脳裏をよぎる。米国の金融危機が世界に広がり、日本も巻き込まれ、期間工、契約社員、派遣社員といった弱い立場の労働者（非正規社員）が、一方的な通告一つで解雇され、同時に社員寮の住いも追い出され、寒空に行くあてもなく、文字どおり路頭に迷う姿が毎日報道されている。更に問題なのは、自殺、殺人、強盗、放火、泥棒といった社会不安増殖現象が、同時に頻発し始めていることである。

日本経済が、グローバルな競争の中で、雇用にある程度の柔軟性と融通性を持たせて競争力を維持したい、とした7年前の改革が、今見直しを求められている。かつて、終身雇用が、日本の高度成長期には有力な生産資源となり、良質な労使、雇用関係とあいまって、高品質、良サービスの基礎となっていた。しかし、グローバル競争下では、逆に低い生産性の温床と批判され、10数年前の不況時に、企業の3つの過剰、債務、雇用、設備の軽減の流れのなかで、少し行過ぎた雇用制度改革が行われてしまったようだ。

日本の社会は欧米のそれと比較しても、極めて同質性の高い社会である。従って、日本的なシステムを作り、日本人の文化、体質にあった仕組みをつくるのが大切だ。一言で言うなら、国際的な競争力は維持しつつも、より充実したセイフティネットを持ち、失業が即社会不安に直結しにくい新しいシステム作りを急がねばならないと思う。例えば、雇用保険、健康保険、厚生年金等は、正規、非正規社員の区別ない程度まで、一種の社会的コストのような考えを導入すべきと思う。ワークシェアリングも日本の社会的特質にあった考え方だと思う。東西ドイツが合併した時、「東独の労働者に仕事を与える為に、西独の労働者は、働く時間と賃金を減らせ」、という考えがあった。日本の現状でも、社会の安定と国民の一体感を醸成するためにも、重要な考え方である。

日本の製品、サービスの品質のよさは、一朝一夕に出来たものではないように思う。底には、良き雇用関係、良き信頼関係、更には忠節な愛社精神が生んだ成果であると思う。しかし、非正規社員が現場の上司、待遇、労働内容に不満を持ち始めたら、継続性のある高品質の製品が出来にくい環境が醸成されつつあると、経営者は認識する必要があるとおもう。いくら優れた、徹底したマニュアルを作っても効果なく、高品質に対する汚染、腐食は着実に進む。

欧米では、書いた契約が全てだが、日本人は、心が通ってないと、社会的文化的には不十分である。

関西のある有名な高級料理店が廃業に追いやられた。 それまでいろいろ問題があった上に、「客の残した食べ残しを、次の客の皿にのせている」、と言った記事がマスコミにのり、それまでの高級イメージが暗転し、客が来なくなってしまったのが原因とあった。 これなぞは、上記問題の本質的な部分に触れている。 要は、何故こんなことが内部で起こり、しかもそれが外部に出てしまうのかである。 非正規社員を含めて全員が、忠節な愛社精神にあふれ、全てがわがことのように思っていたなら、先ずは起こらなかったであろう。似たような例は他にもいくらでもあると思う。

今後継続して、高品質な工業製品を世界に送り込んでゆくのが日本の生きる道ならば、日本のような同質性の高い人口構成、社会性をもった国では、多少コストが嵩んででも、忠節と信頼を両輪とする雇用慣行を創ってゆく必要があるとおもう。 非正規社員が失職しても、次の仕事が見つかるまで、或いは、事情があれば、1年くらいは生活してゆける社会にするには、そんなにコストはかからないと思う。 (平成20年12月)